

* 塔望遠鏡に水タンク設置

塔望遠鏡は1966～67年頃の観測を最後に、塔望遠鏡の後継機として1968年1月に完成した岡山天体物理観測所の65cm太陽クーデ望遠鏡にその役目を譲った。その後、塔望遠鏡の建物は日食観測隊の輸送箱の保管場所になったりする他には使われることはなく、電気、水道の供給も止められてしまった。しかし、その建物は大正末期から昭和初期に建てられたもので、外壁は東京大学のシンボルのようなスクラッチ煉瓦でおおわれており、また非常に堅牢に作られていたので、建物自体は現在でもしっかりしており見た目にも美しく特徴ある建物なので、1998年7月には文化庁に登録され、有形文化財になっている。ところがドーム部分の痛みはひどく雨漏りがするようになり、2009年末から2010年初めにかけて、ドームの屋根の葺き替え、電力回復工事が行われた。雨漏りは修理され、電力も回復したので、湿気が多い半地下の分光室を含め5台の除湿機をフル稼働して除湿に努めている。この塔望遠鏡は建設時から湿気に悩まされてきたが、高分散分光を行うため、温度変化を逃げるように半地下構造にしたため湿気は避けられなかった。しかし昭和初期にはエアコンもなく、塔望遠鏡が建っている南の斜面から通気口を半地下分光室に通し、塔に抜ける通気を行っていた。人が出入りしなくなった現在では、この通気口が狸の通用口となり、塔望遠鏡は狸の住処になっていたのである（アーカイブ室新聞327号参照）。

電気は通じたが、水道が来ていない建物で掃除をするのが大変であった。「そうだ！除湿機は蒸留水を生産するのだ」と気付いたのである。そこで除湿機が生産した水を貯めて有効利用する手を打ったのである。



写真1 300リットルの水タンク

そしてついに購入したのが 300 リットルの水タンクである。水タンクを設置するより水道の回復をしてもらう方がいいに決まっているが、何事にも控え目な筆者は水道工事までは言い出せないでいる。しかし、塔望遠鏡の有効利用を考えるには、水道を引き、トイレを設置することは不可欠である。しかし、昭和の初めから、40 年近く観測に使われたこの建物にトイレがあった時代がない。

塔望遠鏡による観測は写真乾板を使ったものだから暗室が必要で、乾板の現像には水が不可欠であったから当然水道は引かれていた。しかし、昭和 50 年くらいまでは東京天文台は公共の水道がなく、自前の井戸から自前の水道設備で水を供給していた。49 世帯が住んでいた官舎にも自前の水道で水を供給していたのである。

塔望遠鏡のシーロスタットの鏡は、昭和初期には真空蒸着装置がなかったので、塔望遠鏡設置を行った藤田先生は化学的な方法、銀鏡反応を使って鏡面を製作した。そのために使用した蒸留水を購入したガラス製の蒸留水瓶が現在 17 個残っている（写真 2）。これも水タンクには違いない。



写真 2 ズラリと並んだ蒸留水瓶 奥に見えるのは除湿機